

神戸大学国際文化学部・研究科〈EU文化研修プログラム〉
第52回ベルギー研究会ブリュッセル国際大会

プログラム

日 時：2014年3月5日(水) 13時～19時30分

第一部 (13時～16時30分) (企画・運営責任者：中條健志)

会場：神戸大学ブリュッセルオフィス

研究発表

- 石田まりこ (ブラッセルインター校) 「我々と奴ら」の変容
- 石部尚登 (日本大学理工学部助教) 「公的権力の存在を前提としない「事実上の正書法」の固定化」
- 大迫知佳子 (日本学術振興会海外特別研究員・ブリュッセル自由大学)
「独立後のベルギー王国におけるナショナル・アイデンティティー形成への音楽の関与——ブリュッセル王立音楽院の音楽理論教育に焦点をあてて——」
- 杉山美耶子 (ヘント大学博士課程)
「聖なる画中画——ペトルス・クリストゥス作《若い男性の肖像》に描かれた「聖顔」と贖宥——」

第二部 (18時～19時30分) (企画・運営責任者：正木裕子)

会場：シャルリエ美術館

講演

- 利根川由奈 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程)
「「ベルギー美術史」の諸相—初期フランドル派からシュルレアリスムまで—」(英語)
- 正木裕子 (ベルギー王立ブリュッセル音楽院声楽科講師)
「ブリュッセル芸術サロン〈自由美学〉とマーテルランクとその周縁」(フランス語)

演奏会 : ブリュッセル王立音楽院声楽科 正木研究室

-Henri Duparc(1848-1933) / Charle Baudelaire(1821-1867), « L'invitation au voyage » (C.1870)

-Henry Février (1875-1957) / Maurice Maeterlinck(1862-1949), Extrait d'opéra « Monna Vanna » (1909)

-Claude Debussy (1862-1918) / Maurice Maeterlinck, Extrait d'opéra « Pelléas et Mélisande » (1902)

-Claude Debussy / Pierre Louÿs (1812-1889), Chanson de Bilitis (1897)

-François August Gevaert (1828-1908) / Victorien Sardou (1831-1908), Extrait d'opéra « Le Capitaine Henriot »(1864)

研究発表要旨

「我々と奴ら」の変容（石田まりこ）

本発表では、ベルギーの労働組合に焦点を当て、1997年と2001年、2010年という時系列で、日系企業における組合との労使関係の事例研究を報告する。

日本的雇用システムの一つとされる企業別労働組合による労使関係を有する日本企業が、ベルギーの子会社で戸惑うことの一つが、労使の対決的な要素を含む労働組合との関係である。日本本社の中には、ベルギーの労働組合は、既得権にしがみつく利己的な集団と捉える場合もある。

欧州の労働組合の組織率は、低下傾向にあると指摘されている。しかし、ベルギーの労働組合は、ドイツやオランダの労働組合がストライキの回避を特徴とし、組織率が19%台であるのとは異なり、組織率は50%台を維持している。しかし、企業を超えて横断的に組織された労働組合が、2014年にホワイトカラーとブルーカラーが同一の労働組合となり、現在、変容している。

労働組合の変容と、日系企業の中での労働組合が、どのような新たな労使関係を築くに至るのかを今後の研究課題としたい。

公的権力の存在を前提としない「事実上の正書法」の固定化（石部尚登）

正書法の確定は言語計画の重要な一段階であり、通常それは公的権力またはそれに準ずる言語アカデミーを通して行われる。しかし、多くの少数言語では、そうした公的権力の介入とは無縁であった。本発表では、ベルギーのワロン語を事例に、正書法不在の時期とされる18世紀においても、繰り返される辞書の刊行により「事実上の」正書法の収斂がみられたことを示し、公権力の介入も言語運動の存在も前提としない規範化の一端を明らかにする。

独立後のベルギー王国におけるナショナル・アイデンティティー形成への音楽の関与

——ブリュッセル王立音楽院の音楽理論教育に焦点をあてて——（大迫知佳子）

ブリュッセル王立音楽院は、革命を受けて一次的に閉鎖された王立音楽学校を引き継ぐ形で、1832年に開校した。この開校には、国王レオポルド一世、ベルギー政府、そして音楽院初代院長フランソワ＝ジョゼフ・フェティスがともに目指す音楽文化の在り方が関わっていた。すなわちそれは、かつて芸術分野においてこの地域が占めていた高い地位を新国家の下で回復させるというものであった（Vanhulst 2008: 127）。従って、新しい国家を打ち立てていく際に重要視された事柄のひとつとして、音楽院を拠点としたベルギー独自の音楽文化の再興があったと考えることができる。

本発表は、ブリュッセル王立音楽院でフェティスが行った音楽理論教育に着目し、独立後のベルギーにおけるナショナル・アイデンティティーの形成に音楽がどのように関与したのかを探る試みである。このため発表では、1832年の音楽院開校から30年間の1) 規約、2) 運営に関する行政記録、3) コンクールの受賞者名簿、4) コンクール受賞者によるコンサートのプログラム、5) 附属図書館蔵書カタログ、という5種の資料中の音楽理論関連事項に見られる、ベルギーと諸外国の関係を通して考察を行う。

聖なる画中画——ペトルス・クリストゥス作《若い男性の肖像》に描かれた「聖顔」と贖宥——（杉山美耶子）

本発表では、ペトルス・クリストゥスによる《若い男性の肖像》（1460年頃、ロンドン・ナショナル・ギャラリー所蔵）に画中画として描かれた「聖顔」に着目し、その機能を贖宥という観点から検討する。贖宥とは、現世で犯した罪の重さに応じて、死後に煉獄で受けなければならない懲罰の時間軸における軽減を意味する。贖宥と芸術作品の関係は、近年になり徐々に注目されるようになったテーマであるが、初期フランドル絵画の領域においては等閑視され続け、未だ体系的な検討は成されてはいない。ペトルス・クリストゥス作品に関しても、この画中画と贖宥との関係は一部言及されては来たものの、詳細な検討は試みられては来なかった。そこで本発表では、はじめに「聖顔」の基本情報及び図像的特徴を確認した上で、この図像に関連付けられた贖宥祈祷文について検討する。その後、本作品に描かれた「聖顔」が、画中の祈祷者の私的礼拝時における贖宥図像として機能したと同時に、作品全体の意味内容にも関連している可能性を提示する。